

学会発表

- 1) 江原昭善・松本眞・木下實(1984): 伊川津貝塚出土の集積墓(仮称)。第38回日本人類学会・日本民族学会連合大会。
- 2) 相見 満(1984): コノハザルの分布の展開について。第38回日本人類学会・日本民族学会連合大会。
- 3) 瀬戸口烈司(1985): 中新世のマーモセット化石 — 世界ではじめての発見 — 第29回プリマーテス研究会。
- 4) Setoguchi, T. and Rosenberger, A. L. (1984): New Fossil Monkeys from the La Venta of Colombia, South America. 44th Annual Meeting of the Society of Vertebrate Paleontology, Berkeley, California, USA.
- 5) 松本 眞(1984): ヒトの直顎性の特徴。第38回日本人類学会・日本民族学会連合大会。
- 6) 松本 眞(1985): リーフモンキーの四肢のプロポーション — *cristata* と *malalophos* の比較 —。第29回プリマーテス研究会。
- 7) 中久喜正一・江原昭善(1985): マントヒヒの肝臓内血管分布と肝葉区分。第29回プリマーテス研究会。

ニホンザル野外観察施設

川村俊蔵(施設長・兼)・東 滋・渡辺邦夫・足沢貞成¹⁾

本研究所は従来よりの幸島観察所のほかに、ニホンザルの分布北限である下北、南限である屋久島、中部日本の変日本型気候の上信越、表日本型の木曽の4つの研究林地帯をもっている。これら5つのニホンザルの代表的な生息地について研究保護区としての維持をはかり、長期的に安定した条件の下で、ニホンザルの野外研究を展開させることが本施設の任務である。

昭和59年度の各フィールドステーション関係の活動状況は次のとおりである。

1. 幸島観察所

幸島の群れは過去30数年間継続観察されてきており、群れの各成員の出自、生い立ち等々詳細な資料がととのえられている。群れの現状であるが今年度は過去最高の23頭という大量の出産がみら

れた。その原因は島内の食物が、前年の秋に豊作であったこと、長年未経産のままでいた個体が多く出産したことなどがあげられる。しかしその後1~3月の間に次々に死亡し、3月末までの幼児の生存数は9頭となった。一方で幼児の死亡した母親がひきつづき共倒れの的に死亡する例も多く6頭のオトナメスが死亡している。3月ごろからは島が地つづきになりはじめ、干潮時には約100m程度の砂地で結ばれる状態であり、観光客について島から出てくるサルを見張らなければならないことが多くなった。60年3月31日の時点での島内の個体数は主群66頭、マキグループ15頭、ハナレザル10頭を含め91頭である。

今年度は五百部裕による林内での社会交渉の研究、岩本俊孝(宮崎大)による採食戦略の研究、樋口義治(愛知大)による野外でのオペラント学習実験等が行われた。また特定研究「生物の適応戦略」の一環としてイモ洗い等の文化的行動の解析(河合雅雄・渡辺・樋口)、攻撃場面における第3者の役割(渡辺)、子ザルの成長と発達(森梅代)、採食戦略(森明雄)等の研究が継続して行われている。今年度訪れた研究者は延べ376人日であり、他に大学や報道機関等々の訪問者は約延100人日であった。

2. 下北研究林

1984年4月~11月、遊動と土地利用、社会行動の調査が岡野美佐夫(北大・文)、足沢によって行われた。非積雪期の長期調査としては、下北西北部で初めての試みである。積雪期の調査は12月10日入山、同15日から1985年4月5日の112日間、M群の連続追跡を行い主として遊動と土地利用、採食生態、食物資源量の分布と変動についての研究を綿貫豊・中山裕理(共同利用研究員、北大・農)、足沢、東らが行った。これと平行してI群およびARA群の遊動追跡が短期、断続的であるが行われた。

下北研究林の発足後10年に当たり、報告会を行った(12月24日、むつ市下北教育会館)。

3. 上信越研究林

横湯川流域の植生とseed trap法による果実生産量の調査(小見山章、岐阜大)志賀C群の生態、行動調査(陸齊・片山百合夫・丸山勝規、東京農工大)、志賀A₁、A₂、B₂、C群の戸籍簿作り(常田英士、地獄谷野猿公苑)がひきつづき行われた。

横湯川下流域の山ノ内町で頻発する猿害問題について、山ノ内町が猿害対策委員会を組織して対処し始め、和田一雄がそれに参加した。

1) 教務補佐員

4. 木曾研究林

前年度に予報した通り、しょうぶ平にブラインド小舎が完成、クリ・クローバー等による誘引を試みた結果S群が利用しはじめ、至近距離の観察が可能となった。目下全構成員の個体識別が進行中である。この方式はサルに対しては日本のみならず世界でもはじめて採用されたもので、野猿公苑などで従来見られてきた人馴れによる弊害を押しえつつ、実験状況の設定をふくめた研究を推進しうるものと期待できる。給餌を最小限にとどめ、餌場以外での個体識別下の観察を行うこともむろん考えられている。

5. 屋久島研究林

研究林地域において大井徹・丸橋珠樹(霊長研・共同利用)による採食をめぐる競争, D. Sarague, 岡安直比(京大・理), 山極寿一(日本モンキーセンター), 丸橋珠樹によるヤクザル地域個体群の群れの編成にかかわる個体間, 群間関係の分析の研究が行われた。また瀬切川上流域で上部域のヤクザルの生態学的研究が好広真一(竜谷大), 増井憲一(京大・理), 黒木一男(泰星高校), 東によって行われ, 小楊子川および黒味川を中心に高度帯による食性および生態の比較研究が大竹勝(日本モンキーセンター, 共同利用), 山極, 東らによってすすめられた。

今年度の研究林域のセンサスは秋季に行ったが, Ma群以北の8群の資料を得るにとどまった。

西部林道の拡張計画および島内各地での猿害対策に関して, 地元・県・関係官庁との話し合いを前年来の日生研究班・環境科学検討班の活動の一環として行った。

研究概要

1) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

渡辺邦夫・三戸サツエ・山口直嗣・冠地富士男

従来からの継続として, ポピュレーション動態に関する諸資料を収集し, 定期的にはほぼ全個体の体重を測定している。また集団内でおこったトピカルなできごとや, 通年の変化について分析をすすめている。

2) ニホンザルの社会生態学, とくに自然群の環境利用とグルーピング・社会構造

東 滋・足沢貞成

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で, 遊動する群れがしめす生活と社会現象をとらえなおすために, 屋久島と下北半島西部の地域個体群について継続的な調査を行っている。

3) 下北北西域の群れの遊動に関する研究

足沢貞成

下北北西域のM, I, Z, 各群ともニホンザルでは有数の広大な遊動域をもつ。なぜそうなのか, また内部の構造はどうなっているのか, の二点に焦点を当てて資料を集めつつある。

4) 熱帯降雨林の霊長類の群集生態学

東 滋

同所的に生息する数種の霊長類について種間関係, 個体群構造, 資源利用などに関して比較社会生態学的研究を行い, communityのなりたちを考える。

報告・その他

- 1) 水野昭憲; 谷田一三, 上馬康生, 鳥居春己, 東 滋, 丸山直樹, 古林賢恒, 伊藤健雄, 高槻成紀, 大泰司紀之(1984): 森林環境の変化と大型野生動物の生息動態に関する基礎的研究。昭和59年度 環境庁自然保護局(委託研究報告)。
- 2) Azuma, S., Suzuki, A. and Ruhayat Y. (1984): The distribution of primates in Sebulu and R. Mahakam. Kyoto University Overseas Research Report of Studies on Asian Non-Human Primates, 3: 45-54.
- 3) 渡辺邦夫(1983): 魚を食うサル。モンキー 193・194:24.
- 4) 東 滋(1984): 屋久島のサルと森の歴史。田川日出夫編, 生物圏保護区(特に屋久島)の基礎研究, 「環境科学」研究報告集 B235. S 903:20-24

学会発表等

- 1) 東 滋: 屋久島の動物的自然と人。シンポジウム, わが国の自然保護を考える。於大阪市立大学(1984)
- 2) 東 滋: マダガスカル・アンブル山国立公園におけるキツネザル2種の種間関係。第21回日本アフリカ学会学術大会(1984)
- 3) 渡辺邦夫, 樋口義台, 河合雅雄: 幸島における“文化的行動”の現状について。第29回プリマーテス研究会(1985)
- 4) 足沢貞成: 下北半島西北部のニホンザルの現状と保護」下北研究林報告会 於むつ市。(1984)